

聞きとり調査

酷寒過酷なノルマ

和歌山県 山本 富三

終戦時の所属部隊から報告させていただきます。

関東軍の第二六三八部隊の第十六野戦自動車廠に入隊しました。これは昭和十九年十月でした。そのときの階級は陸軍技術一等兵。終戦の場所は広東省の延吉というところでした。ソ連への抑留経路と収容場所は、彈春を経てクラスキーへ、フンガリ、アムルリ川流域の三〇五収容所へ収容されました。帰国のときの乗船地はナホトカで、昭和二十四年七月二十九日に出航しました。八月五日に内地へ上陸して復員しました。職業は、いろいろ

と変わりまして、昭南工業へ行ったり、なかの勤務ではなしに、シベリアから帰ってきたという肩書があるために、日雇いのような形で石炭の運搬とか、また大阪ガスのガス管の工事、丸善石油の埋め立て、新浜製材と転々と変わって、昭和三十年三月二十六日に現在の清涼飲料水製造業を始めました。生活状態といいますと、どうかこうにかというところです。

終戦から入ソ初期の苦勞をちょっと報告させていただきますと、昭和二十年八月に武装解除されたのは、朝鮮とソ連の国境近くにある広東省の延吉というところでした。数日後、ソ連の兵士に監視されながら、「東京ダモイ、東京ダモイ」と言われて、持てるだけの荷物を持って兵営をあとにしました。満州の八月は下旬とはいえ、日中の暑さは真夏そのものでした。焼けつくような太陽

のもと、木陰のない一本道を「東京ダモイ」の言葉に励まされてただ黙々と歩き続けました。道中一番苦労したことといえば、水と木のないことでした。のどがかわいても、くんできた水に浄水液を入れ、臭くなるくらいの水を飲まねばならないし、飯ごう炊さんをするにも、まきのかわりに枯れ草を大量に集めなければならないことでした。無理な強行軍で病人や落伍者がどんどんでるし、健康な人でも荷物の重さに耐えられず、一つまた一つと道端へ投げ捨てて、最後には自分の米まで捨てて座り込んでしまう者もありました。他人の飯をあてにするのではなく、もうどうなってもええからというのです。そんな苦労をしてやっとの思いで着いた目的地の地名ははっきり知らなかったが、もう夜中に近いころでした。しかし、ここが日本に帰れる港の近くかと思うと、今までの疲れなどは一気に吹っ飛んでしまいました。夜が明けて、集会から帰った班長に、東京ダモイどころか、引揚船を待つ間、しばらく作業隊を編成してこの近くで働くことになったということでした。それが長い四年間のシベリア生活の始まりとはだれも知りませんでした。

私たちの最初に収容されたラーゲルは、沿海州の奥地にある森の中に、高い丸木の塀に囲まれた古ぼけた収容所でした。番号は三〇五、もしかしたらここが私たちの墓場になるのではと一瞬思いました。起床時刻はたしか七時ごろだったと思いますが、ほとんどの人はもう目を覚ましていました。なぜかといいますと、空腹で眠っていられないからです。食事当番が朝食を運んでくれるのが一番うれしかったが、昼食用のパンも一緒に配給されるので、三度の食事で満腹感を味わえない私たちは、一日一回でもよいからと昼食用のパンまで食べてしまいました。そのかわり昼食の楽しみはもうありません。伐採作業等のときは、夏は野草や木の実をとって、スープの入った飯ごうに入れ、煮て食べたことがありますが、その期間はほんの短いものでした。長い冬はそうもいきません。草は枯れ、木の実も枯れて、量を増すのは雪だけでした。スープの味がなくなるぐらい雪を飯ごうに詰め込んで、沸騰させてなんとか一時の満腹感を味わうだけでした。

私たちの労働といえば、ほとんどは重労働でした。伐

採、線路工事、貨物船の荷役、れんが焼き、どれをとっても健康なソ連労働者のノルマは、栄養失調でフラフラとした半病人のような日本人にはとても一〇〇%達成などできるはずがありませんでした。例えば、穀物の積みおろしでも、一袋の重量は自分の体重よりはるかに重いものばかりでした。なかでも一番つらかったのは冬期の夜間作業です。真夜中、普通列車が通らない時間帯に、バラスを積んだ貨物列車が来て、我々をたたき起こして列車に乗せて現場まで行き、次の列車の通過時刻までに終わるようなのしられながらせき立てられることでした。伐採作業にしても、夏の森の中は大変むし暑く、蚊やブヨに攻められながら、切れない鋸で必死にノルマに挑戦しました。冬は凍りついた鋸やタポールを持って、自由に動けない雪の中でくたくたになるまで働かされました。やっと作業が終わり、帰り道には、直径十五センチから二十センチ、長さ二メートルぐらいの重たい木を担ぎ、長い凍りついた道をただうつむいて、前の人の足元だけを見ながら歩くだけでした。

デモクラシーの教育は、旧軍隊の階級章をはずすこと

から始まりました。働くものは主人公であるということ
を徹底的にたたき込まれました。この教育は二十三年ごろからほとんど毎晩のように行われるようになりました。

引揚船の中で一番思い出すのは、食中毒に見舞われた
ことです。二十四年の明優丸の引揚者、ソ連での抑留生活
が長かったためか、割合に洗脳された団結心が強かつ
たように思います。それが後日になっていろいろと災い
のものとになり、就職するのにも死にたい思いをしたこと
もありました。まだまだつらかった思い出がたくさんあ
りますが、ひとまずこのぐらいで終わらせていただきます。

—— どうもありがとうございました。

ナホトカ第三収容所への道遠し

和歌山県 宮 本 彰

—— では、引き続きまして、宮本彰さんの体験談を